

ておりましたが、四、五日してやうやう煙もなくなったなあと話会っている内に「あの一八月十五日の終戦の詔勅をラジオで聞くことになりました。

坑内は「水ぼつ」仕事は出来ず半月位の間に今度は終戦、其の内に「ソ連」も参戦して樺太は「ソ連」の支配下になり我々の家族は外地という地に本国に帰る日を夢見て過ごしていることだろう。

「私の家族は妻と子供三人」私は八月二十日に会社に御願いして退職の手続きをし、北海道へ来て其の日から外地に残留している家族の引揚の運動をなすべく友人知人を尋ね歩き、数年後の引揚者の函館迎え入れに、家族の対面に尽力して来ました。

御蔭様で私の家族も二十八年引揚げて参り、当地赤平炭鉱で戦後の無一文から立ちあがり、五人の子供も全員一人前に成人致し、妻と幸せな日を過ごしております。夫婦共に「身体障害者」ですが不自由ながら満足しています有難う御座います。

## 北樺太の抑留に耐えて

北海道 中谷 豊

第二次大戦末期、私は戦争の渦中に巻き込まれ、終戦捕虜の体験を思い起こす。

昭和二十年八月七日ソ連軍の参戦、国境突破の情報を受け、守備隊救援のため北上する。

樺太の国境近く、気屯に到着、砲声が聞こえる。戦闘するも、ソ連軍の戦車を先頭の進攻で、内路村まで撤退する。

牛馬の屍、累々と横たわり臭気が漂う。

路上は恵須取町方面より避難する住民で一杯だ。赤児を背に幼子の手を取り、ある者は泣く元気も無く。路上にうづくまりぼうぜん自失だ。頭髮衣類は泥だらけの逃避、戦争の悲惨が目には焼き付く。

どうしようもないいだち、日本敗戦の末路を見た。

ソ連戦車のくる前に早く逃げてくれと、避難民の無事を

祈るだけ。

日本は無条件降伏、戦争の幕を閉じた。私達は捕虜となり上敷香の旧兵舎に収容され、旧海軍飛行場爆破跡の修理が主要な作業だった。

ソ連軍より短日作業の名目で、第二梯団として私達も出発する。これが私の三年四か月の捕虜の始まりである。

北上気屯を過ぎ古屯に至る。戦死者は日ソ両軍共に多数の犠牲が出た地、八方山を見る。私の幼な友、和田義春君の戦死の所、冥福を祈る。

泥田の道を進む、いよいよ国境まさに大森林だ。田中少尉指揮下で謎の国、鉄のカーテンに第一歩を踏み出した。

作業地セジモイレチカで、農場の馬糞薯掘り、広大な土地、朝は太陽が顔を出したら作業地へ、太陽が沈むまでの作業。

苦しい毎日でした。軍靴をはいたまま一か月が過ぎ、足はむれて水虫になり、軍足は足首より下は腐れて素足同様だ。

冬期にはいる前の牧草の刈取り、ツンドラ地帯での一日中、水の中での作業、寒さで足の間が感覚がない。

夜は作業の疲れで熟睡、焚火の火の粉で毛布は穴だらけ、軍靴が焦げるのも気付かない。星が夜空に一杯細かく散らばっている、氷のような月が輝いている、異国の空だ。

十二月オノールで、木材の伐採が主要作業だ。火力発電所、将校官舎、一般兵舎、一日平均百二十本の伐採量だ。四十人が二人一組で、零下四十度の寒中作業、五月中旬中隊に復帰する。

次の作業は道路工事、旧日本の半田沢より、デールピンスクまで、数百キロの道程。過酷な労働だった。工事は十一月末、一千人の血と汗の結晶で完成した。

十二月念願の帰国、真岡へと晴れやかな気持ちになった。知取で数時間停車、妹が駅で働いていた。私の姿を見てぼうぜんとしている。『兄さん生きていたの』戦死と聞いたと言う、当然と思う。後は涙で何も言えない。肉親の元気な顔を見て思わずへたり込む。

『兄さんどこに帰るの』の一言でどこに帰れば良いの

か狼狽する。父母は幼少に死別、自分の帰る所がない。取り敢えず「北海道だ」妹は不安な顔でうなづく、複雑な思いだった。

真岡到着後、樺太出身者の残留希望者受付が始まった。駅での淋しげな妹の顔が浮かぶ。肉親の情は離れがたく残留組を志望。

戦友の帰国を見送ることも出来ず、港の倉庫へ、数日後王子製紙の幕舎に移されて工場の作業。

騙された忿懣やる方ない、戦友と帰国すべきだった。収容所に戻され、港湾労働だ。ドングロースにはいつたむぎ粉重量九十キロ、実働十二時間、体はバラバラだ。五月豊原に移され製材所の丸太搬入、一か月後内測炭鉱に移る。まるで渡り鳥だ。

コライト積み込み作業、日夜の区別がない。夏冬上半身裸だ。寒くても零下二十度前後、北樺太から比べたら楽なものだった。

十月に入り大隊に復帰する。夕食より白米の食事だ。新品の下着、軍服、軍靴が支給され、帰国命令が出た。

真岡収容所で過去を忍ぶ、長い日々であった。終戦、

捕虜、北樺太、真岡、豊原、内測、幾多の中隊をめぐり、多数の戦友とも別れ、三年四か月の捕虜の終止符だ。

私達は、青春を損失し、苦しい数々の思い出ばかり、人との厚い友情が心の中に湧いてくる。苦しさを通って来た心の高まりだ。耐えて生きて来たのだ。

船上より真岡、というより樺太を見る。二度と踏むことのない我が故郷、私を二十三年真育ててくれた島よ。雲仙丸は白い航跡を残し、一路北海道をを目指す。

私達の前途には未知の人生が、始まろうとしている、甘い考えはゆるされない。函館 祖国だ。昭和二十三年十一月祖国

## 敗戦後の空襲

北海道 三上敏子

私にとっての戦争は、終戦の日より始まりました。

私達は、終戦後、北海道に引揚げることとなり、十六歳以上、六十歳未満の男性を残し、女と子供だけで、貨